



22060149

**JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Monday 22 May 2006 (morning)  
Lundi 22 mai 2006 (matin)  
Lunes 22 de mayo de 2006 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説を書きなさい。

1 (a)

大正五年十二月八日の夜、私は漱石山房の泊まり番にあたって病篤<sup>あつ</sup>き先生の隣の部屋に、当番のお医者と炬をかこんで、不眠の一夜を明かした。その暁近く、先生の脈拍は百四十を越えた。大学病院から特派せられている五十位の看護婦長がはきはきした口調で、二時間または一時間おきの容態を、炬辺のお医者<sup>お</sup>に報告するのである。そうして、夜が明けた。

5 九日の薄暮に、先生は亡くなられた。門下の者が交替で、先生の看病した当番は、私まで来て、終わったのである。

その九日の朝は、当時私の奉職していた陸軍士官学校の、第三十期新入生徒入校式があるはずになっていた。そう云う儀式のやかましい学校ではあるし、また先生の容態がちよつとその式に行つて来る位の間なら、急変もなかりうと云うお医者<sup>お</sup>の言葉を頼みにして、  
10 早稲田南町の先生の家から、十分もかからない近くにある士官学校に出かけて行つた。家からフロックコートを取り寄せて、山高帽子をかぶり、薬王寺の通りを、上ずった気持ちで、ふらふらと歩いて行つた。

入校式は、湖のように広い中庭で挙行せられた。生徒の集団が、もやもやした黄色い煙のかたまりの様に浮動した。中隊長の大尉が叫ぶ号令の声は、塀の向こうで猫が泣いている様に聞こえた。私は幾度も前にのめりそうになつては、その度につばを耳の奥の方に飲み込んだ。

式が終わつてから、十九番の教室で、私のこれから受け持つ生徒に訓示することになつた。その教室は大地震後の改築で、もうなくなった事と思うけれど、恐ろしく陰気で、出入口が一つしかなかった。出入口の真正面に、黒板と教壇があつて、奥行き<sup>おく</sup>の遠い、縦長の教室であつた。その時間になつたので、私は教官室を出て行つた。軍隊では、廊下は野天と心得るのだそう<sup>う</sup>で、いやしくも一步部屋を出る時には威容をととのえるために、必ず帽子をかぶつて歩くのである。私が山高帽子をかぶつて、その十九番教室に近づくと、私の足音を聞いたのか、あるいは覗<sup>のぞ</sup>いて見ていたか知らないが、当番の生徒が烈<sup>はげ</sup>しい声を出して、気をつけの号令をかけた。一体、先方ではまだ私の顔を知らないはずなんだから、  
25 その教室に近づいただけで、あわてなくともよさそうなものだけ<sup>う</sup>けれど、向こうの見当が運よく適中して、私はその教室に入つて行つたのである。

入口から教壇に向かう通路の両側に、気をつけを喰らつた生徒達は石の如く硬直し、何年来<sup>らい</sup>そうして起つて<sup>た</sup>いるかの様に、静まり返つていた。私は、入口で脱いだ帽子を片手に持つて、静々と教壇に向かつて行つた。その教室は、初めてなので、勝手を知らなかつたけれど、教壇がむやみに高く、向かつた左側に、小さな踏み段が一つ附いている。私はその方に向かつて厳肅なる歩みを進めた。前列の生徒の正面を通るのである。生徒達は、

35 しらじらと真ともを向いて、何処を眺めているのだから解らないけれど、何か知ら一点を、  
 気絶するちよつと前の如くに昇<sup>+</sup>据えているのである。私は、その前をすまして通り過ぎ、  
 勝手のちがった高い教壇の、小さな踏み段に片足をかけて、身体をその上に乗せかけたところまでは、はつきりしているのである。その次の瞬間に、恐ろしく大きな音がして、私は  
 40 フロックコートの裾を散らしたまま、土足の床の上に、仰向けに、ひっくり返つたらしいのである。ひっくり返る途<sup>と</sup>端<sup>たん</sup>に、非常に大げさな尻餅<sup>しりもち</sup>をつき、ついでに頭を少々ぶつ  
 けたかも知れない。何がどうなったのだから、私には少しもわからなかった。しかし、その  
 拍子に、昨夜からの、一睡もしなかつた悲痛な気持ちを、どうなりこうなり人前だけ包ん  
 45 でいた薄皮が破れて、何だかわけも解らず、わあつと泣き出しそうな滅<sup>め</sup>茶<sup>ち</sup>苦<sup>く</sup>茶<sup>ち</sup>な気持ちに  
 なりかけたところを、やつと我慢して起き上がって見たら、前列の端の生徒の足もとに、  
 変な黒いものが転がっているのが私の山高帽子である。 (中略)

私は踏み段のない教壇に、大またをひろげて片足をかけ、はずみをつけて、やつと上  
 45 上がった。そうしてきまりの悪いのをこらえて、生徒の前に起つたけれど、彼等は、丸で  
 何事もなかつたように澄まし返つて、つづばらかつたまま、くすりともいわない。私はま  
 すます照れてしまつて、向こうが知らぬ顔をしているのに、自分の方で、ひっくり返つた  
 原因なり、所感なりを述べて、その場を繕うこともならず、軍人の生徒つて、非人情なも  
 のだと、つくづく感じたのである。

50 それから間もなくお正月になつて、その級の生徒の一人が、私の家へ年賀に来た。私は  
 入校式当日のことを思い出して、一体、ああ云う時に、笑いもしなければ、自分の足もと  
 に転がっている山高帽子を捨ててもくれない。現に見ているくせに、丸つきり知らぬ顔  
 55 しているんだから、こちらは、しくじりの引つ込みがつかない。将校生徒と云うものは、  
 恐ろしく素つ氣ないものだね、と云つたら、その生徒は、おしるこを頬ばつていた箸を止  
 めて、私を正視しながら云つた。「私共は、他人の失敗を見て笑うのは、いけないことだと  
 教わっております」

(内田百聞<sup>ひやうけん</sup>『百鬼園隨筆<sup>ひやうきえん</sup>』一九三三年、現代仮名遣いに一部変更。)

(注)

内田百聞 (一八八九〜一九七二) 夏目漱石門下の人。代表作に『冥土』『旅順入隊式』『百鬼園隨筆』などがある。

漱石山房 漱石が明治四〇年(一九〇七)から居住していた、東京牛込区早稲田南町の家。

フロックコート 男性用正式礼服。黒の上着はダブルで丈が長く、縞柄のズボンをはく。

山高帽子 上部が丸く高い、黒のフェルト製の帽子。フロックコートなどの礼装に用いる。

1 (b)

見えない木

雪のうえに足跡があつた  
足跡を見て はじめてぼくは  
小動物の 小鳥の 森のけものたちの  
支配する世界を見た

5 たとえば一匹のりすである  
その足跡は老いたにれの木からおりて  
小径を横断し

もみの林のなかに消えている  
瞬時のためらいも 不安も 気のきいた疑問符も そこにはなかつた

10 また 一匹の狐である  
彼の足音は村の北側の谷つたいの道を  
直線状にどこまでもつづいている

ぼくの知っている飢餓は  
このような直線を描くことはけつしてなかつた

15 この足跡のような弾力的な 盲目的な 肯定的なリズムは  
ぼくの心にはなかつた  
たとえば一羽の小鳥である

その声よりも透明な足跡  
その生よりもするどい爪の跡

20 雪の斜面にきざまれた彼女の羽  
ぼくの知っている恐怖は

このような単一な模様を描くことはけつしてなかつた  
この羽跡のような肉感的な 異端的な 肯定的なリズムは  
ぼくの心にはなかつたものだ

25 突然 浅間山の頂点に大きな日没がくる

なにものかが森をつくり  
谷の口をおしひろげ  
寒冷な空気をひき裂く

ぼくは小屋にかえる

30 ぼくはストーブをたく

ぼくは  
見えない木

見えない鳥  
見えない小動物  
35 ぼくは  
見えないリズムのことばかり考える

(田村隆一「見えない木」一九六二年五月号『文芸』初出)

(注) 田村隆一<sup>たむらういつ</sup>(一九三三—一九九八)詩人。昭和十九年学徒出陣。昭和三年月刊「荒地」創刊編集。代表作に「四千の日と夜」「詩と批評(五卷)」などがある。

---